

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00146

研究課題名(和文)『音楽についての対話』(1000頃) その受容と展開

研究課題名(英文) Dialogus de musica (ca.1000): transmission and reception

研究代表者

西間木 真(NISHIMAGI, SHIN)

東京藝術大学・音楽学部・准教授

研究者番号：10780380

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：『音楽についての対話 Dialogus de musica』(c.1000)は、アルプス以北に伝承する過程でさまざまな加筆や改訂の対象となり、そこから新しい理論書やトナリウスが生み出された。本研究では『対話』の全写本を比較検討し、伝承の経路と受容について検討した。同時に『対話』の影響がみられる未刊行のアキテーヌ・トナリウス(パリ7185写本とパリ7211写本)を校訂・分析した。その結果、カロリング時代から伝わる古代の理論と『対話』の実践的な理論の融合が試みられていることが明らかになった。さらにフクバルドゥスの『音楽』(c. 900)とアレツォのガイド『韻文規則』(1025 頃)を訳出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一次史料の網羅的な調査・研究によって西洋音楽史の上で重要な理論書のクリティカル・エディションを作成したことで、今後の文化史、音楽学研究の基盤を確立することになる。同時に一次文献の網羅的な調査によって未刊行の史料を調査、分析、校訂することで、『対話』およびアレツォのガイドの理論によって淘汰された11-12世紀の未知の音楽理論や音楽教育実践に光を当てて新しい研究テーマを開拓した。さらにフクバルト『音楽』、アレツォのガイド『韻文規則』など音楽史上の基本文献の日本語訳を作成し、広く一般に紹介した。

研究成果の概要(英文)：The Dialogus de musica, written in northern Italy, probably Lombardy, around 1000, is transmitted by more than fifty medieval manuscripts. The Dialogus de musica was object of corrections and additions by the copists during the course of its transmission to the ultramontane countries. Because of the numerous variants and the complexity of the manuscript traditions, no modern critical edition of this theoretical text has been realized by any contemporary musicologists. In preparation for the publication of a new critical edition, I have collated all known manuscripts of the Dialogus de musica and grouped them according to their textual particularities and specific musical examples. On the other hand, I established editions of two pseudo-odoniens textes, Petistis obnixe and two aquitanian tonaries (Paris, BnF lat. 7211, lat. 7185), and translated two treatises in Japanese, the Musica of Hucbald (c. 900) and the Regulae rhythmicae of Guido of Arezzo (c.1025).

研究分野：音楽学、歴史学

キーワード：『音楽についての対話』 アレツォのガイド 中世音楽理論 中世音楽教育 中世写本

1. 研究開始当初の背景

西洋音楽史の上で 11 世紀から 12 世紀にかけての時期は、現在世界中で広く一般に用いられている音楽上の理論と記譜法、さらにそれらに基づく音楽教授法が二人のイタリア人音楽教師、つまり『音楽についての対話 (Dialogus de musica)』(1000 年頃)の著者とアレツォのガイド (990 頃-1033)によって確立されヨーロッパ全体に普及した変革期である。教師と生徒の対話形式で書かれた『対話』は、モノコルドゥムの分割による音階、旋律的音程、各旋法の構成と音域など音楽実践 (pratica)に関わる基礎的な事柄を多数の実例を挙げて解説した小論であり、オクターブごとに七つの音高を A から G までのアルファベット 7 文字で表す文字記譜法、ガンマ音、休止によって分割されるフレーズと終止音による旋法の分類に関する最古の文献とされる。カロリング時代に北フランスで著された一連の音楽理論書のようにギリシア語に由来する難解な専門用語を使わない、平易なラテン語で書かれた『対話』は、しばしばアレツォのガイドの著作と同じ小冊子に書写され、教会改革の流れの中でアルプス以北のヨーロッパ各地に短期間で伝播した。

『音楽についての対話』のアルファベット記譜法やガイド式譜線記譜法の普及によって、教師がいなくても独学で未知の聖歌を初見で歌えるようになった。その結果、典礼聖歌レパートリーの習得に費やされる時間が大幅に短縮され、音楽の教育や実践に変化が生じた。一方、全音階の枠に収まらないレパートリーの移高や書き換えなど、口頭伝承を前提としたネウマ記譜法の時代には考慮する必要のなかった理論上の問題が生じ、解決策が模索されるようになった。そうした動きの中で『対話』の理論や枠組みを展開させる形で、さまざまな理論書やトナリウスが新たに生み出された。フランス中部から北部にかけてのカロリング時代の伝統を引き継ぐ地域では『対話』およびガイドの実践的な音楽理論と、ポエティウス (480 頃-524)によって伝えられた古代ギリシアの音楽理論を融合する試みもみられるようになった。

こうした音楽史上の重要性にも関わらず、『音楽についての対話』の批判的校訂版はいまだ実現されていない。そのため『対話』の伝播や受容、さらにその影響を受けて著された音楽書やトナリウスについても個別的な史料研究にとどまっている。報告者は 2017 年 4 月～2020 年 3 月に実施した「『音楽についての対話』(1000 年頃)の校訂と分析」(基盤 C)において、暫定的なクリティカル・エディションを作成し、『対話』の受容と展開について研究を実施する基盤を確立した。

2. 研究の目的

本研究は、11-12 世紀の音楽理論および音楽教育実践のあり方について『音楽についての対話』の受容と、『対話』をもとに展開されたさまざまなタイプの音楽理論書およ

びトナリウスの分析という二つの観点から検証し、そこから得られた新たな知見を地域の音楽上の伝統やレパートリーと照らし合わせて考察することを目的とする。

『音楽についての対話』は、音程や旋法といった初歩的な事柄を多くの曲例を挙げながら解説した実践的な教育を反映した内容をもつ。そのためボエティウスやアレツォのガイドの著作と比較して、写字生による加筆や変更が多くみられる。ラテン語の構文を説明するために全体の単語を並び替えた「読み下し版」が作成されることもあった(ライデン写本、ヴェネチア写本など)。そのため『対話』を伝える 56 写本のヴァリエントを精査し、各史料の由来に関するこれまでの研究と照合すれば、『対話』の伝播の過程が明らかになるだけでなく、地域ごとの受容のあり方が解明できると期待される。

また『音楽についての対話』はそれ自体に加筆や変更が加えられただけではなく、新しい理論書やトナリウスを生み出す「素材」として活用された。例えば旋法に関する論考や典礼聖歌のレパートリーを旋法ごとに分類した「トナリウス」では、章立てや解説部分に『対話』の一部を引用したものが少なくない(カンブレ写本、グルノーブル写本など)。また『対話』からの引用がみられない場合でも、『対話』を模倣した記述を含むトナリウスも確認されている(パリ 7185 写本など)。『対話』をパラフレーズした暗記用の短文や暗記歌も生み出され、それらを集めた冊子が別冊付録のように編纂されることもあった(パリ 3713 写本)。

11-12 世紀にカロリング時代の音楽教育の伝統を守るヨーロッパ西部の地域で『音楽についての対話』をもとに生み出された理論的テキストやトナリウスの中には、地域固有の音楽用語("remicha"や "informatio"など)や低音の B フラット音、大完全音組織ではみとめられない楽音のギリシア式音名など、『対話』による A-G 式アルファベット記譜法やガイド式線記譜法の定着によってその後淘汰され、従来の音楽史では知られてこなかったさまざまな理論的試みの痕跡が確認されることがある。『対話』からの直接的あるいは間接的な影響がみとめられる理論的テキストを調査・分析し、さらに同時代のトナリウスにまとめられた音楽レパートリーと照合すれば、11-12 世紀の音楽理論や教育実践のあり方が地域ごとに明らかになると期待される。

3. 研究の方法

『音楽についての対話』およびアレツォのガイドの著作の伝播と受容については、これまでドイツ語圏(スイス・南ドイツ、ライン川地方、リエージュ)の史料を中心に研究が進められてきた。一方、カロリング時代の教育の伝統が根付いていた北フランス、および独自の記譜法と聖歌レパートリーを展開していた南フランスの地域における受容と影響についてはこれまで等閑にふされてきた。そこで本研究では、フランスおよびアングロ=ノルマン文化圏に焦点を絞り『対話』の受容とその展開について検討した。

まず『音楽についての対話』を伝える 56 写本のヴァリエントを精査し、これまでに校合した一次史料のグループ分けを行なった。特に南フランスと北フランス方面の史料、

次にイタリア内部の史料について伝播の経路をたどり、受容のあり方を考察した。

次に 11-12 世紀にヨーロッパ西部で書写された音楽理論写本を網羅的に調査し、『音楽についての対話』をもとに生み出された新しい理論的テキストやトナリウスを確認した。確認されたテキストのうち『対話』の影響がみられる史料を整理し、未刊行テキストについては校訂を行った。

最後に『音楽についての対話』の受容研究から明らかになる地理的な枠に、フランスおよびイギリス系の写本にみられる理論的テキストとトナリウスの分析の成果を組み入れることで、11-12 世紀における音楽理論および音楽教育実践のあり方について検討した。

4. 研究成果

先に挙げた三つの観点から研究を実施し、以下の成果を得た。

A. 伝播と受容

『音楽についての対話』を伝える全ての一次史料を校合し、比較検討した結果、イタリア、ドイツ、フランス系という大きく三つのグループに分けられ、それらが二つずつのグループに細分化されることが分かった。さらにそれらの六つのグループが、東西にまたがって二つの系統に分けられることが明らかになった。このことは『対話』が二つの版で東西それぞれに流布していた可能性を示唆する。またもとのテキストが、別の写字生によって別系統の *lecon* に従って修正されている例もみられた（パリ 7211 写本、ダルムシュタット写本など）。このグループ分け作業によってテキストの伝承と受容がより明快に示されるようになったばかりではなく、より「オリジナル」に近い形のテキストが明らかになってきた。この研究成果については、2022 年 8 月にアテネで開催された国際音楽学会で口頭発表を行った。今後、さらなる見直しを行い、最終的にクリティカル・エディションの序文として執筆する予定である。

史料のグループ分けとテキスト伝承を明らかにするためにまた、9 写本で『音楽についての対話』の「序文」として伝えられている小論『熱心に頼むので (*Petistis obnix*)』について一次史料の校合およびテキストの見直しを実施した。この短い序文については、1971 年に Michel Huglo が批判的校訂を発表している。しかし今回の作業を通して、Huglo のエディションではいくつかの単語が欠落していることが確認されたため、新たにエディションを作成した。この改訂版は、今後刊行予定のエディションに付録として所収する予定である。

さらにこれまでの研究で準備したクリティカル・エディションに基づき、『音楽についての対話』の日本語訳を発表した。その作業を通して、これまでに準備した暫定的なラテン語エディションの原文の区切りや句読点の見直しをはかった（『エクフラシス - ヨーロッパ文化研究』11 巻、2021 年）。

B. 受容と展開

Martin Gerbertus (1784)および Lucia Ludovica De Nardo(2007)による『音楽についての対話』のエディションでは、ドイツ語圏に由来する3写本(ロチェスター92 1200 写本、ミュンヘン Clm 14663 写本, ウィーン 2503 写本)の他に、フランス起源とされるパリ 7211 写本第3分冊が底本に数えられている。この写本は12世紀以前の音楽理論書を書写した複数の写本の合本であり、11-12世紀のフランス地域における音楽理論の受容や変遷を知る手がかりをあたえてくれる。そこで同写本の第4分冊に収められているレオムのアウレリアヌス『音楽論 *Musica disciplina*』(c. 850)の改編版(11世紀)を校訂・分析した。この改編版では、各旋法の解説を旋法ごとにまとめ直し、そこにアキテーヌ式ネウマで記譜された曲例が加えられている。このパリ 7211 写本版については、アウレリアヌスの新エディションの付録として出版した(Chr. Meyer, S. Nishimagi, Aurelien de Reome, *Musica disciplina*, Brepols, 2021)。

次に、未刊行のアキテーヌ・トナリウス断片(パリ 7185 写本)を校訂・分析した。サン・マルシャル修道院に由来する一連のアキテーヌ・トナリウスとは異なり、理論書としての性格をもつこのトナリウスでは旋法に関する様々な理論が紹介されているが、各旋法の曲例の解説部分に『音楽についての対話』の影響がみとめられる。このトナリウスでは大完全音組織ではみとめられない楽音にギリシア語式の音名があたえられており、カロリング時代から伝わる古代の理論と『対話』の実践的な理論の融合が試みられていることが明らかになった。また第2旋法のトナリウス部に低音のBフラットからはじまる曲例が挙げられており、『対話』とグイドの影響で聖歌集の旋律の書き換えが行われる直前の様子が見えてくる(*Etudes gregoriennes*, t. 49, 2022)。

C. 日本語訳

『音楽についての対話』を音楽理論史上に位置づけるため、カロリング時代の音楽教師フクバルドゥスの『音楽 (*Musica*)』(c. 900)とアレツォのグイド『韻文規則 (*Regulae rhythmicae*)』(1025 頃)を既存のエディションに基づいて訳出した。フクバルドゥスは、曲例を挙げながら古代の大完全音組織と中世の旋法の音階を解説しているが、旋律を構成する音程について上行と下行の説明に『対話』への影響が見られる(『エクフラシス - - ヨーロッパ文化研究』(早稲田大学)12巻、2022年)。グイドの『規則』は、グイドの他の3書で説明されている理論を韻文でまとめたものであるが、今回の訳出により8p + 7ppからなる *poeme rythmique* の形式で書かれ3行で1スタンザを構成していること、現在伝えられているものには文章の入れ替えや他の理論家によると思われる加筆が確認されることが明らかになった(『エクフラシス - - ヨーロッパ文化研究』(早稲田大学)13巻、2023年)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 西間木 真	4. 巻 12
2. 論文標題 サン・タマンのフクバルドゥス『音楽 (Musica)』(900 頃) 翻訳	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 エクフラスィス ヨーロッパ文化研究(早稲田大学)	6. 最初と最後の頁 20-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 西間木真	4. 巻 11
2. 論文標題 『音楽についての対話』(1000 頃) 解題と翻訳	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 エクフラスィス ヨーロッパ文化研究	6. 最初と最後の頁 85-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 西間木真	4. 巻 13
2. 論文標題 アレツォのガイド『韻文規則 (Regulae rhythmicae)』(1025 頃) 翻訳	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 エクフラスィス ヨーロッパ文化研究	6. 最初と最後の頁 18-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 NISHIMAGI, Shin	4. 巻 49
2. 論文標題 Fragment d'un tonaire aquitain de la fin du XIle siecle (Paris, BnF, Lat. 7185, F. 109, 117-125). Edition et commentaire	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Etudes gregoriennes	6. 最初と最後の頁 1-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 NISHIMAGI, Shin
2. 発表標題 Traditions des sources du Dialogus de musica (c. 1000)
3. 学会等名 IMS 2022 21st Quinquennial Congress of the International Musicological Society (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 NISHIMAGI, Shin ; MEYER, Christian	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Brepols	5. 総ページ数 354
3. 書名 Aurelien de Reome, Musica disciplina	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------